

解答と配点

問題番号 (配点)									
100 1									
8	7	6	5	4	3	2		1	
						B	A	イ	ア
(c)	(b)	(d)	(d)	(c)	(a)	(b)	(a)	(c)	(e)
16	10	16	10	10	16	7	7	4	4

1 解説

1 ア 「口上」は1「口頭で述べることや、その内容」、2「口のきき方、ものいい」、3「歌舞伎などで、代表者が舞台から観客に対して述べるあいさつ」などの意味や用法を持つ言葉。正答は(e)。各選択肢のカタカナ部分を漢字に直したものは、以下のとおり。

- (a) 厚遇 (b) 休耕 (c) 工事 (d) 受講 (e) 口頭
 イ「拍子」は1「音楽のリズムを形成する基本単位を示す音楽用語」、2「ちょうどそのとき、とたん」、3「ものごとの進む勢い、調子」などの意味や用法を持つ言葉。正答は(c)。各選択肢のカタカナ部分を漢字に直したものは、以下のとおり。
- (a) 漂流 (b) 圧迫 (c) 脈拍 (d) 書評 (e) 宿泊

2 A 「A」の前文「～なっている」が条件で、その条件を満たさなければ「～で」きなくなってしまう。という文脈。正答は(a)「そうでなければ」。

B 「本格ミステリ作品は『完全な形式体系』になっなければならない」という内容の「B」前文に対し、「『完全な形式体系』というものはあり得ない」と否定する内容の文が続く。正答は(b)「しかし」。

3 傍線部①内「そのような頁」は、傍線部の前文と選択肢から、「〈読者への挑戦〉の頁」を指すとわかる。問2で確認したように、本格ミステリ作品は、理念的には「完全な形式体系になっなければならない」が、「完全な形式体系」なるものは「あり得ない」ということだった。その例として挙げられているのが、「〈読者への挑戦〉の頁」を含む作品。

「〈読者への挑戦〉の頁」は「作品内の情報だけで論理的に唯一の解決にたどり着けることを保証する」ため、つまり、作品が確かに「完全な形式体系」になっていると読者に確認してもらうために挟み込まれる。しかし、その挟み込みが、かえって「作品が『完全な形式体系』になっっていないこと」を証明してしまうという皮肉な状況にある。傍線部①に続く三文（「〈読者への～できない。」）で説明されているように、たとえ読者が作品世界内の無矛盾（＝閉じた世界であること）を確認できても、作中の人物である探偵には確認できない。このことを過不足なく表現しているのは(a)。

「〈読者への挑戦〉の頁」は、読者に対し作品世界の完全性についての保証・確認を求めているの

であり、(b)「(作品の)完結」や、(c)「(事件の)解決」を委ねているわけではない。(d)は「不完全性を証明してしまっている」の説明になっていない。

4 [C] 直後の「()書きに着目する。()書きは、(1)直前の語句の言い換え (2)直前の語句の補足説明 で用いられる。[C] 直後の「(メタ犯人)」は(1)の用法、同じ段落の三文目「(さらには)可能性……」は(2)の用法である。つまり、[C]を含む一文は、「その世界が閉じていることを知り得ない以上、探偵は常にメタ犯人が介入している可能性を疑わざるを得ないからである。」と同義となり、「メタ犯人」の意味内容を考えればよいことになる。

[C] が含まれる段落の具体例(「たとえば」以降の内容)によれば、探偵がAを犯人だと推理したとしても、本格ミステリ作品の世界内においては、「Aの背後にいる真犯人B」、さらには「Bの背後にいる真犯人C」…と、無限に疑わざるを得ないということである。この状況を言い得ているのは(c)。

なお、[C] 直後の「メタ犯人」について、接頭辞「メタ(meta)」の意味として「超越した」「高次の」を知っていれば、正答に容易にたどり着ける。近年よく耳にする「メタバース」は meta と universe (宇宙)を合わせて出来た造語。本文後半に出てくる「メタレベル」は「一段高いレベル」の意味。

5 まずは、本文と選択肢内容から、[D]と[E]はともに、本文に記述されているある状況や「端的にまとめた言葉」であると確認する。[D]の直前の「ここに至って」から、前段落までの内容を受けて[D]という状況が確定した、という文脈であるとわかる。「にもかかわらず」は前述の内容から予想外の方向への転換を示す表現。ここから[E]の内容に移ると考える。

[D] について。前段落の内容は、問4で確認したとおり。本格ミステリの登場人物である探偵は、作品世界内で無限に犯人を疑うことになってしまふ。「ここに至って」どうなるかは、[D]を含む文の次の文で説明されているように、「探偵は論理性を厳密に突き詰めようとするればするほど、唯一の解決にたどり着けなく」ということである。この状況を言い表した言葉はどれかと考えると、「探偵が、期待されている役目(＝論理的な推理)を果たせなくなる」という意味で、「探偵の敗北」が適当だと判断できる。

[E] について。「にもかかわらず」の前までは、「探偵は論理的な推理ができない」という内容。「にもかかわらず」、探偵が「『これが唯一絶対の解決だ』と宣言する」としたら…と、仮定の話をしている。仮にそのような探偵がいるとすれば、その人物の言葉は「詐欺師の口上」とでも呼ぶべきものであり、「研ぎ澄まされた論理によって(真実)にたどり着く者」という意味での「探偵」は、「存在しない」と述べられている。「探偵の罪」や「探偵の死」が当てはまりそうだが、[D]「探偵の敗北」と併せて考えると、組み合わせとしては(d) (D 探偵の敗北 — E 探偵の死)が最も適当となる。

6 傍線部②の含まれる段落を冒頭から読めば、作家たちは、自身の作品世界の破綻を招きかねない「後期クイーン的問題」の追究・対応に取り組んだとわかる。選択肢はそこその長さがあるものの、「(する)ために」以外の部分は全て同じ。したがって、作家が何を目的として「後期クイーンの問題」の追究に取り組んだかを、本文を根拠に判断することが求められる。傍線部②の付近だけを読んでも確証は持てないが、全ての選択肢に共通する「メタレベル」についての記述に着目するとよい。「メタレベル」自体の意味については問4で確認したとおり。本文で「メタレベル」についての記述があるのは最後の二段落なので、そこまで読んで判断する。最終段落の三文目後半～四文目を根拠に、(d)が正答と判断できる。

「F」を含む文全体を読めば、「後期クイーンの問題」の根本原因が「F」であると思われる。さらに、続く二文で「読者」と「探偵」それぞれが置かれている状況が説明されている。「読者」は作品の世界が完結している」と知っており、「探偵」は作品の世界が完結していると知ることができない。探偵が、問4で扱った「メタ犯人」や、「F」を含む段落で述べられている「新たな手がかり」の出現の可能性を無限に疑い続けざるを得ないという例が示すとおり、作中の登場人物である探偵には、その世界が「閉じている」と知り得ないことが、「後期クイーンの問題」の根源。正答は(b)。

傍線部③を含む段落の冒頭「このことは」は、前段落の内容を指す。「後期クイーンの問題」における「決定不可能状態」の回避には、探偵が自らを取り巻く世界を「区切る」ことが必要だが、その「区切る」という行為には恣意性が伴うということである。それを受けて、傍線部③の直前では「区切る」という行為の一つ目の側面が、本格ミステリ作品に登場する探偵が「自身の推理のみによって〈真実〉に到達できないことを示している」とまとめられている。

それに対して「区切る」という行為にはもう一つの側面があると説明しているのが、傍線部③以降の部分である。すなわち「区切る」という行為は、「探偵が〈真実〉に到達するための条件」としても捉えられるということである。「一方で」とある場合は、必ず対になるものがあるはず。読解の上では、何に対して「一方で」なのかを意識する。

注意したいのは「『区切る』ことさえすれば、それだけで探偵が〈真実〉に到達できる」というわけではない、ということ。探偵が〈真実〉にたどり着くには他にも満たすべき要件があるという内容が、傍線部③以降と、その次の段落で述べられている。以上から、世界を「区切る」ことは、不可能だと思われていた〈真実〉に到達する可能性をひらくという意味で、正答は(c)。

(a) 「くによつてのみ」のように「唯一無二の方法である」という表現では説明されていない。

(b) 「恣意的な区切り」の許諾の有無は述べられていない。

(d) (a)と同様で「唯一無二の方法である」という表現では説明されていない。また、後半部「論理的な推理に頼ることができない」は、傍線部③の前の段落の後半の内容に合致するが、傍線部③「〈真実〉に到達するための条件を示しているともいえる」の説明としては蛇足。